

長

州藩士であった榎村正直(一八三四〜一八九六)は、明治元年(一八六八)以来京都府に仕出し、初代の府知事・長谷信篤の下で参事などを歴任した人物である。明治八年(一八七五)には二代目の京都府知事となり、勸業政策を推し進めたことでもその名を知られている。当時、その榎村の相談役として頭角をあらわしていたのが、会津藩士であった山本覚馬(一八二八〜一八九二)である。覚馬は、戊辰戦争のち京都の薩摩藩邸に幽閉されていたが、榎村に見出されて京都府顧問に取り立てられた。蘭学者として海外の事情にも精通していたため、京都復興のために必要な人物と考えられたこと故の人事であった。

覚馬による施策の一端は、薩摩藩に幽閉されていた慶應四年(一八六八)八月に著した建白書『管見』に記されている。この書は覚馬に代わり、同じく獄舎に起居していた会津藩士・野沢鶏二(一八五二〜一九三二)が筆記したものであり、同書には、当時大阪に滞在していたドイツの造船技術者・機械工学技師の(ヘニング・ルドルフ・フェルディナン・ト・レーン)(Henning Rudolph Ferdinand Lehmann, 一八四二〜一九一四)や、オランダ軍医クーンラート・ウォルテル・ハラタマ(Koonrad Wolter Gramma, 一八三二〜一八八八)などお雇い外国人から直接聞いた情報も多分に含まれている。覚馬が『管見』で強調するのは、商工業を中心にした立国ならびに人材育成の重要性である。この考へ方は、榎村の施策とも多くの類似点が見られることから、榎村の施策案そのものが覚馬の強い影響を受けていたことがうかがわれる。京都の勸業政策を強固に推進した榎村、ならびに覚馬に才を見出され、京都府政になくはならない人物として出仕を命ぜられたのが明石博高である。

開業医だった明石は医学の研究に飽きたらず、理化学の研究にも積極的に取り組んでいた。明石はその延長線上で、医師として大阪に赴く傍ら、大阪舎密局においてハラタマのもと理化学の伝習を受けていたのであった。ハラタマという人物を紹介し、まずここに覚馬との繋

創業の背景

京都の近代化のなかで

光平有希・川勝美早子

がりがうかがえる。また、京都で明石は「煉真舎」という研究会を有志で開いていた。榎村は、京都府の御用掛をしていた三井源右衛門から同会を紹介され、例会に参加したことを機に明石と知り合うことになる。榎村が参加した例会で、明石は大いに新知識を取り入れて文化を興隆し、産業を開発すべきことを力説した。榎村は、明石が有為の人材であることを知り、その後、縦横にその経験や理論を府政で発揮するよう懇請したのであった。その求めに応じ、明石は大阪舎密局を辞したのち、明治三年(一八七〇)に三井を紹介して京都府に仕出し、勸業政策の実務者として活躍するに至る。こうして京都府に集った榎村と覚馬と明石、この三名によって勸業政策が強力に進められ、こうして再開拓された京都の文化土壌は、次なる時代の先駆者を誕生させることに繋がる。その先駆者こそ、島津源蔵であった。

明治二年(一八六九)、薩摩藩の幽閉より釈放された覚馬が最初に仮住まいしたのは、島津製作所(現・島津製作所創業記念資料館)の真向かいであった。また、榎村の自宅もそこからほど近く、近代化の推進者たちは一時期、木屋町二条界隈に結集するかのように住居を構えていたのである。この地は、運河高瀬川の起点として京都の暮らしを支えた物資の集散地「一之船入」があり、その周辺に、勸業場、舎密局などが立ち並び、京都再興に向けた物資と情報の拠点でもあった。その地に育った源蔵がその後、国産の教育用理化学器械をつくり、理化学器械のカatalogや科学に関する雑誌の発刊などを通して科学知識の普及にも力を尽くすことに至ったのは、周りの環境が大きく影響していると思われる。



榎村正直
京都府立京都学・歴史館所蔵



山本覚馬
同志社大学
同志社社史資料センター所蔵

